
緑の目

ダーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の目

【著者名】

ダーツ

【Zコード】

N5451Y

【あらすじ】

この広い宇宙を守る、宇宙最強の軍隊、P・E軍。この軍隊には宇宙の所々からの依頼が集まる。そして今回、宇宙トップクラスの盗賊を退治して欲しいとある星の王女からの依頼が入った！

P・E軍中将の主人公「アミ」と、P・E軍総出で懸かる史上最大の作戦が今始まる！

「んにちは、ダーツです。
まだ下手くせだと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。」

今日も、俺は上を見上げる。

特に何もする事がない。

どこかのちょっととした金持ちが座つて、いるような椅子の背もたれに体重をかけ、じっと上を見上げる。

上にある小さい窓から見える何千もの数の星を見る。

俺はこの小さい窓からの景色が大好きだった。

見ていると、沢山の光たちが俺の方を向いて笑つているような感じがする。

そしてその笑顔と共に懶々しい記憶も甦つてくれる。

何故だらう。

笑顔は人を愉快にさせる表情なのに。

笑顔だけ思い出せば楽だ。

……でもその笑顔があるから俺は苦しんできたんだ。

その笑顔があるから叫びが際立つて聞こえてしまつんだ。

このよつこ星を見ると嫌な気持ちになるの。

何故上を見てしまつのだろひ。

やはりまだ根に残つてゐるのか。

これまで聞いてきた悲痛な叫びがまだ耳に残つてゐるからか。

では何故この景色が好きなんだ？

訳がわからぬ。

笑顔が好きだから？

でも嫌な事を沢山思い出してしまつなり、自分の好きなものをすぐ
に払い落とすはずだ。

俺はそんな人間だった。

では何故だらう。

考え続ける。目を瞑り、星達の光の残像を眼蓋の裏で感じる。

何も思い浮かばない。

嫌な事を思い出してまでする事に何の意味があるのか。

わからないままに俺は上を見上げる。

この愛しくも、憎い星達を見ながら。

何を求めるのかも何がしたいのかもわからないまま。

俺は何かを求め続ける。

この授かった

澄んだ緑色の、真っ直ぐな目で。

「あ~~~~~」

俺は大きくあくびをする。

任務も全て完了し、後に残した物が無くなつた俺は、いつものように艦長室に入り、ぼーっとしていた。

俺はアリ。いやんと本名はあるが、みんなからはアリと呼ばれている。

俺はP・E軍（Planet・Earth）の本部中将。そしてオリオン艦隊指令長官、そして艦隊の戦艦ビッグイーグルの艦長を務める。

俺が所属しているP・E軍は国ごとに分けられており、俺が所属しているのは日本。Planet・Earth・JAPAN すなわち、PEと呼ばれることがある。

よつて、アメリカならPEA、中国ならPECと呼ばれるわけだ。

俺は15分ほど艦長室でぼーつとしていた。

艦長室は、茶色をモチーフにしており、壁、机、椅子、絨毯など、

全て茶色がかつた色をしていた。

中で休むには心を和ませる色だが、緊張している場面では緊張感を醸し出す、その場の雰囲気に合わせられる一番の色だと俺は思っていた。

そして「」の艦長室には部屋の天井に小さく窓があった。

そこからは満天の星が顔を覗かせる。

そこには星を見ていると時間を忘れてしまってやうな感じに駆られる。

そして嫌な過去を思い出しそうになる。

そして俺は目を瞑る。

忘れかけていた時間を徐々に思へ出していくのを感じる。

「アリーナ」

俺はびくりとした。

一気に現実に引き戻される。

「ああ、なんだ奏か

「またぼーっとしてたの?」

「うん、今日は疲れたから」

顔立ちが良く、スラッシュした体型の少女が現れた。

彼女の名は水野 奏。

俺と同い年の少女。俺と同じ時期にP·E軍に入った昔からの仲間である。水中部隊という隊に所属している。階級は大尉。ちなみに俺は15歳である。

「ところで何の用だ?」

奏は思い出したように顔をハッとするも用件を言い出した。

「うん、なんかまた新しく任務が入ってきたって

「え? また任務か? 俺はもう今日5つやつてきたんだぞ?」

「なんかどつかの調査に行つて欲しいって

少しの間の沈黙の時が流れれる。

何故こんな疲れている時に……。

「はあ～～

俺は深いため息をついた。

「ヒュード、ビーンなんだ？ その調査して欲しい場所は？」

「あ、なんか惑星スカーレットっていつ所だつて」

「ああ、あそこか…」

太陽よりも熱いといわれる有名な惑星。

今は日本時間で午後9時頃。今から太陽よりも熱いなんていわれる所に行くなんてやる気が出るはずがなかつた。

だが仕方ない。

「あ～～～、しゃーない、頑張るかあ～！」

「うん、頑張つてね！」

もつと休みたかったが、任務が入つてしまつた。疲れた体にムチを打つて椅子から立ち上がつた。

もっと別のヤツに任せてもいいだろ？と心の奥で思いつつ、奏と共に艦長室を出た。

さあまた、忙しい任務が始まる。

疲れと待ち時間

俺は奏と一緒に外に出て、さつき教えてもらった集合場所に一人でのんびり歩いてゆく。

今日も星空が綺麗だつた。

宇宙空間に滞在する船なので、風は吹いていないが、外に出ると少しは爽やかな気持ちになれた。

そして歩きながら兵士達に軽く挨拶。

兵士達も明るく挨拶。

元気だなあと思いながら兵士達の行動を歩きながら少し観察。

いつも通りの日。

俺は集合場所に着き、軽くため息をつくと首をポキポキと鳴らした。

周りを見回すと、誰も人がいなかつた。

任務に行くメンバーはまだ来ていないようだ。

俺は人を待つのは別に嫌いじゃないが、今だけとても不愉快だつた。こんなに疲れている時に立ちながら人を待つのはやはり体に響いた。

体がきしむ。

だが、集合場所で待つていてる時にはビッグイーグルの力強い姿が目に入り、疲れた俺を癒してくれた。

何度も聞く目にしているが、やはり見ていて飽きない。

目の前には白いボディ、数々の大砲、武器を磨いたり点検したりするP.E.の兵士達、そして目の前で一際目立っているものが目に入る。

その一際目立っているものは、この戦艦ビッグイーグルの主砲。これまでにこの主砲で幾つもの敵や障害物を蹴散らしてきた。

そしてこの戦艦ビッグイーグルは宇宙最大・最強の戦艦と言われているらしい。

大きさはなんと本州ほどあり、そして主砲の大きさは長野県ほどあるという。

俺は初めてこれを聞いたときにはかなりビックリしたが、『こんなすごい船に乗っているのか!』ととても感動した。

そして今、艦長という仕事をもらい、務めていられる事を心から誇りに思っている。

昔の感動の余韻を味わっていると、ある一人の少年が現れた。

歳は11、12歳くらいだった。体型は痩せ型である。

「あ、アハアさん、」んばんは

俺の名を呼び、軽く挨拶。ちゃんとお辞儀をする。礼儀はなつているようだ。

「ああ、お前も今呼び出されたのか？」

かなりの疲れ顔で質問をする。

俺の顔を見た少年が少し笑った気がした。

だがそれに突っ込むのも面倒臭く、突っ込む元気もなかつた。

そして少年は真顔で答える。

「いや、今じゃないですよ。前から話は聞いていました。そうですね、10日くらい前です。で、今日が任務の日です。」

俺はキヨトンとした顔で聞きかえす。

「あれ？ 前から話あつたの？」

その少年は困った顔で頭を少し搔いた。

俺は少しため息をついた。
そしてまた質問。

「え、じゃあ俺は誰に呼ばれたんだ？」

その少年は表情を少し変え、口を動かし始める。

「あ……、なんかまだまだ新米の俺達だけで行かせるのは心配だから……、誰か上の人を連れてこいつて言われたんですけど……」

「それで俺か……」

一気に疲れがどつと出た。

どうやら俺はこいつとその他の任務のメンバーに呼ばれ、即席の責任者として同行するらしい。

なかなか面倒な事をしてくれたなど心の奥底で思いながら更に質問を進める。

「他にもつといいやつがいたんじやないか?」

すると痩せ型の少年は申し訳なさそうに答える。

「いや……、思い当たる人があなたしかいなくて……」

少年はすいませんと頭を下げて俺に謝った。

「まあ、いいけど……」

俺は言葉を終えると、座り込んで下を向いてしまった。
それを見た少年はまた謝り始める。

大丈夫だよ、と言いつつ、少年を落ちつかせると、また下を向く。

この体勢が一番楽だ。

「あ、ああ、アリさん、みんなが来る前に任務の説明をしておきま
すね。」

俺は下を向きながらも耳を傾ける。

「では、いいですか？」

今回の任務は、惑星スカーレットの調査です。依頼主はスペース・
キャリーの職員だそうです。」

「スペース・キャリー……」

スペース・キャリーとは、宇宙の所々を飛び回る宇宙の荷配便。
俺達P・Eもかなりお世話になっている。

「んで？その職員は何て言つてたんだ？」

俺は下を向きながら尋ねる。

「はい、なんか、15日前、こつものよつて配達をしていて、惑星

スカーレットの近くを通りた時に、何か不思議なものを見たそうなんです。」

「……不思議なもの?」

「はい。なんか雲一つ無い惑星スカーレットで、雷のような電気が走っていたそうです。」

「……電気……」

俺は考える。

不思議だ。

惑星スカーレットといえば、太陽よりも熱い星。

雲なんて出来るはずが無いし、そんな所に軽く出入り出来るのは、P・E軍か、その他の科学技術が進んだ星。そうすると、的はかなり絞られてしまう。

もつとも、入れたとしても、電気を流したり出来る機械が無い。すぐ使い物にならなくなってしまう。

では一体何が……

「最近P・E軍全体の中で惑星スカーレットに行つたっていう記録はあるか?」

「いや、無いですよ。第一、的は少数に絞られているんです。それも本部から連絡が来ています」

それもそうだ。

P・Eだつてわかつてゐるはず。これから任務に行くやつらに言わないはずが無い。

「……あー」

俺は忘れかけていた重要な事を思い出した。

「そういえば、他のやつらはどうした?」

少年はギクッとした表情を見せ、俺の方を向く。

「い、いや、その……」

その少年は黙ってしまった。

みんな任務の日を忘れてたとか言い出すのだろうか。

「あ? どうしてだ?」

俺は物凄い目つきで少年を見る。

しばらくの沈黙の後、少年は重い口を開いた。

「あ、……あの……、み、みんな……任務を忘れてて、……」
来る途中、連絡したらすぐに行くつて……

案の定、みんな揃つて任務を忘れていたようだ。

こんなに疲れている時人に待たせ、その上任務を忘れたときた。
不愉快極まり無い事だった。

だが忘れてしまったものはしじうがない。

「んで？そいつらは今から来るのか？」

「…………は、はい…………すいません……」

少年は俺に向かつて三度目の謝罪をする。

それに今回は頭を深々と下げて。

「…………まあ、いいやー！」

「…………え？」

少年は俺の意外な言葉に驚いたようだった。

「任務忘れる事なんて、俺もしじつちゅうあつたからな。……でも俺だから良かつたけど、他の口づるさこやつだつたら大変だつたぜ？お前も少し遅れたからな」

少年は顔を上げ、安堵の表情を見せた。

「何だ？そんなに安心したのか？」

あまりにも少年の表情が大きく変わったため、一瞬も驚いてしまつた。

「はい！だつて、

この前の任務の時にも遅れてしまつて、その時はすげかつたんです

もん

かなり明るい声だった。

この話を聞いて、じいつは遅刻が多い事がわかつた。

「……何度も遅刻するのは良くねえな……」

「……はい……」

少年は弱々しく返事をするとまた少し暗い顔をした。

そしてまた謝った。

「まあ、そんな暗い顔すんなよ。これから遅れなきゃいい

俺は少し優しい声で注意を促した。

すると少年はまた明るい表情を見せ、

「はいー。」

と良い返事をした。

それから5分後、任務のメンバーがよつやく集合した。

許そつかなと思ったが、先ほどの体の痛みと待たされていた苛立ち

が残っていたため、頭にきて少しあつづけ注意した。

少し前に過ぎたかなと思いつつ、小型の宇宙船に乗る。

目指すは、地獄の星、惑星スカーレット。

どんな任務になるのか。

疲れながらも、これから何が起つるのか、考え、心を躍らせながら出発した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451y/>

緑の目

2011年11月21日10時58分発行